

「夢幻能」をとらえなおす

重田みち

今日、能に関心のある人で、「夢幻能」という言葉を知らない人はほとんどあるまい。多くの能楽研究者の間でも、「夢幻能」は、「ワキの夢の中にシテが「本来の姿」で登場する能」を典型とするとされ、そこに「ワキが夢を見ているかどうか、詞章からはわからない曲もある」という但し書が添えられている。

そして、「一場物(単式)夢幻能」よりは「二場物(複式)夢幻能」が典型であるとされる。

しかし「夢幻能」という言葉自体は、元来、學術用語(學術的に厳密に定義された言葉)ではなかった。また、今日の能の基礎が築かれた十四、五世紀当時の言葉でもなく、近代に入ってから使われるようになったものであり、当時の視点を正確に表現していない可能性もある。なるほど、「夢幻能」と呼んでも差し支えないような、ワキの夢にシテが姿を現すというプロットを持った作品群も実際に存在する。

『忠度』『井筒』などがそれに当たる。しかし、それはあくまでもプロットにかかわる事柄である。それが、「複式夢幻能」という言葉が新たに作られたように、「夢幻能」が作品の構造についての事柄と混同されるようになったところに、問題の核心があるように思われる。

世阿弥当時の能の構造に関して、ここ数十年来、世阿弥伝書『三道』の説、すなわち、一曲を、原則的に「序破急」五段によって構成すべしとの説が、研究者の間で注目されてきた。そして、そのような構造の典型である「老体」「女体」「軍体」の二場物の能を、いつの頃からか、「典型的な夢幻能」すなわち「複式夢幻能」と呼ぶようになった。そのような能では、二場のうちの前場に、シテが「本来の姿」を隠した庶民の老人姿などで現れ、後場に、ワキの夢の中などの場面設定によって、シテが「本来の姿」を現すものとされている。

能の構造にかかわらせて「夢幻能」と呼ぶケースは、『葵上』『恋重荷』『道成寺』のような曲も、夢幻能的特徴を備えていると見る点にも表れている。すなわち前場・後場に分かれ、後場に幽霊が現実に登場するこれらの曲も、典型的ではないが「準夢幻能」などと呼ばれることがある。

ここで再度、これまで「夢幻能」と呼ばれてきた二場物の能のプロットを、後場でのシテが現れるきっかけに焦点を絞って、具体的に見直してみよう。すると、次のような型に、ほぼ分けられる。

- ・ワキの夢の中に亡霊等が現れるもの(夢型)
- ……『融』『清経』『八島』『忠度』『井筒』『松浦』『阿古屋松』『難波』など
- ・読経によって亡霊等が現れるもの(読経型)
- ……『通盛』『鶴』『江口』『浮舟』『砧』『芭蕉』『海人』『田村』など
- ・念仏によって亡霊等が現れるもの(念仏型)
- ……『敦盛』『実盛』『檜垣』『松風』『求塚』『通小町』など
- ・加持によって亡霊等が現れるもの(加持型)
- ……『葵上』『船橋』『道成寺』『野守』など
- ・ワキの前に神の類が実際に影向するもの(影向型)
- ……『弓八幡』『高砂』『老松』『養老』など

こうして分類してみると、「夢型」は案外少ないことに気づかされる。それにもかかわらず、従来は、これらすべてが一括され「夢幻能」と呼ばれていた。また一方、読経・念仏といった甲いによって、幽霊が姿を現すというプロットが多いにもかかわらず、「夢幻能」という呼称によって、そのことへの注意が逸らされてきた面もあるように思われる。つまり、右の分類のうち、「夢型」以外はすべて宗教が絡んでおり、十四、五世紀の能に、宗教性が多く必要とされたこと、あるいは宗教性を帯びた能が作能の歴史から見れば基本的にあり、夢型は特別であることが見えにくくなるという弊害が、これらを一括して「夢幻能」と呼ぶことによって生じるのではないか、ということである。

そして、「複式夢幻能」という能の構造上のとらえ方による最大の弊害は、祝言的協能を典型とする老体の能と、修羅能などの幽霊能との差を見えにくくしてしまった点にあるように思われる。右に私に分類したうちの「影向型」つまり典型的な祝言的協能は、これまでに「複式夢幻能」に含められていた。しかし、右のように分類してみると容易に気づくことであるが、神が登場する能であって「夢型」である能は、きわめて例外的である。

その一つが『阿古屋松』であるが、これは、阿古屋松にワキを連れて行き、ひとり塩釜に帰って行った老人姿の塩釜明神が、阿古屋松のもとで眠るワキの夢の中に現れる、という筋である。要するに、ワキが眠る場所が塩釜明神の存する場所と離れているために、明神が直接現れることが不自然であると見なされ、夢型として作られたものと推測される。その逆は、ワキがわざわざ神(神松)のいる住吉に赴く、そうであるからこそ神が「影向」できる『高砂』であろう。

またもう一つの例外は、祝言的協能と呼ぶことが可能な『難波』であるが、本曲のシテは、日本の神ではなく、百済国の王仁の霊である——ただし現世に執着を残した通常の霊ではない——点が、他の祝言的協能と大きく異なる。そのため、日本の神の現れ方である「影向」という形を取ることができなかったものと推測される。

一方、「影向」という言葉ですぐに想起されるのが、いわゆる「護法型」の能であろう。そのように呼ばれる能では、護法善神(護法)や役行者(谷行)などの神格的な存在が、現実に姿を見せる。つまり、「護法型」の能は、「影向型」の古い形式であるとも言える。昨年この『鎮仙』に書かせていただいた「老体の能

の「複式夢幻能化」(五七〇号)では、この「護法型」の能と祝言的協能との近さを論じたのであったが、その時に論じた事柄に加え、通常の祝言的協能が「夢型」でなく「影向型」を取ることには、「護法型」との関係の深さを示唆する——根本的に両者が同じ型であることを示す——、大きな特徴ではなからうか。このように、現れ方が異なる点においても、通常の祝言的協能(神能)は、通常の幽霊能とは切り離してとらえられるべきものと考える。

皮肉なことに、右の拙稿ではそのような祝言的協能を、研究者の慣習上「複式夢幻能」と呼んだのであったが、いまはその呼称は撤回したい。今後は、能の構造上での呼称としての「夢幻能」という言葉を、私は使わず、一方、プロットに焦点を当てたうえでの分類として、それぞれ「夢型」「読経型」「念仏型」「加持型」「影向型」の能、という言葉を用いることにする。そして、能の時間構造を示した『三道』の説の、「老体」と「軍体」との差にさらに注目し、「(複式)夢幻能」ではない、より適切な用語を開拓したい。

(早稲田大学演劇博物館客員研究員)